

第119回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年7月8日(月) 14時～17時

兼題「山開き」

- 川井素山 ○秘境の宿夏炉を飾る串料理  
梓川ヨーデル響く山開  
沖焦がす漁火の群れ夏の月  
水馬日差しに消ゆる心字池
- 保井寶正 ○山開き融通無碍な山の神  
夕立や軒を拝借鼓門  
緑陰や職人憩ふ午後三時  
水源地湖底のぞくや喜雨の音
- 佐久間喬 ○法螺貝に<sup>かしこ</sup>畏まりみる山開  
  
朝まだき<sup>びやくえ</sup>白衣列なす山開  
尾緒までぴんと凛々しく鮎焼けり  
梅雨寒や大辛カレーワイン酌む
- 丸山酔宵子 ○雲切れてピッケル光る山開  
柳川の川下りなり泥鰯鍋  
ターナーの如く梅雨空薄陽射す  
川に沿ふ柳を狙ふ驟雨かな
- 吉田啓悟 ○先ず以つて男の咽せるところてん  
五能線無人駅なる夏つばめ  
夏やせて更に父似となりしかほ  
今はただ眺めるだけの山開
- 青木英林 ○街はまだ宵の賑はひ夏の月  
蓮ひらく眠る乙女が目覚かな  
都会にも富士塚ありて山開  
  
幼さの残る舞妓や<sup>ゆか</sup>川床料理

- 山本草風 ○梅雨晴間空の広さに変はりなし  
山開き祝詞朗々雲はらふ  
緑蔭に書斎を移す昼下がり  
盃重ね暮れるを待てる夏至夕べ
- 渡辺鯨波 ○山開き富士見坂より礼拝す  
祝詞入れ写メール送る山開  
片陰に揺れる双子のベビーカー  
心太突いて会話の弾みけり
- 後藤克彦 ○梅雨晴間そつと目開く磨崖仏  
山開き色とりどりのリュックかな  
梅雨晴間店の片隅忘れ傘  
残りたる枇杷の実二つ熟れ落ちる
- 永井正孝 ○鬼灯市功德信じてあがなえり  
山開き上越国境賑わえり  
夏場所や星数ひとつの浮き世かな  
菖蒲湯を肩にかけつつ香気食む
- 原 唱如 ○フルートの銀の涼風五指十指  
朗々とアルプホルンの山開  
夏うぐいす芭蕉の句碑に鳴けにけり  
すつぽりと梅雨の座敷に居りにけり
- 金森純女 ○羅のうなじは白き夕まぐれ  
わきあがる雲に向かいて山開  
楽し気に管巻く父や洗ひ鯉  
ビー玉のダイブしてのちラムネかな
- 青葉ひかる ○豪邸の古家に染みるアカンサス  
山開き紺碧の空白きこころ  
涙かな紅いカンナの花咲きて  
七夕の短冊流し赦し乞う

次回「萩句会」 8月は休会です

日時 2019年9月9日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第2会議室

兼題 『鴉の贅（もずのにえ）』一句  
当季雑詠 三句